

全国盲ろう教育研究会 会報 第16号

2018. 5月発行

全国盲ろう教育研究会事務局

新緑の季節を迎え、草木の新芽の香りが漂う季節となりました。今年度から生活環境が変化した方もいらっしゃると思いますが、慣れてきたころでしょうか。

当研究会に集ってくださる皆様お一人お一人に、少しでも有益な情報を提供していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

●全国盲ろう教育研究会第15回研究協議会・定期総会報告

2017年8月5日（土）・6日（日）、全国盲ろう教育研究会第15回研究協議会を国立特別支援教育総合研究所にて開催しました。久里浜の海を眺めながらの研究協議会に全国から100名ほどの方が参加くださいました。盲ろうの子どもたち、ボランティアさんを含めると約140名程の方々にお集まりいただきました。



講演者の森敦史氏

今回の研究協議会実施にあたりましては、前回に引き続き、国立特別支援教育総合研究所と筑波大学附属久里浜特別支援学校のご支援、ご協力をいただき、快適な環境の中で研究協議会が実施でき、盲ろう児者のプログラムも進められましたことに感謝いたします。また、盲ろう児者の活動プログラムの実施にあたりましては、多くのボランティアの方々にご協力いただきましたこと、心よりお礼申し上げます。

以下のようなプログラムで実施しました。

【1日目 8月5日（土）】

○開会式

○講演

「先天性盲ろうA児のファンタジーを理解する経過とその考察
～自らを分析する～」

筑波技術大学大学院1年 森 敦史 氏

○分科会（以下の5グループに分かれ、実施）

- ①盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ
- ②盲ろう疑似体験
- ③就学前の子どもたちとのかかわり
- ④サポートブックをつくってみよう
- ⑤講演者を囲んで ～何でも聴いてみよう～

【2日目 8月6日（日）】

○実践報告

「盲ろうAさんの教育実践報告
～感情・感性共有型コミュニケーションを考える～」

横浜訓盲学院 後石原 恵美子 氏

○ポスターセッション

○分科会の報告

- ・1日目の各分科会の報告
- ・盲ろう児者の活動の様子について報告

○閉会式

2日間の様子を紙面にて報告いたします。

事務局の責任において概要をまとめさせていただきました。



●第15回定期総会報告 【8月6日 9:00~9:30】

会長挨拶後、出席者数・委任状数を報告・確認し、議事案件の審議に入りました。

・議案1 2016年度事業報告

以下の通り、提案がなされました。

1. 運営委員会を随時開催し、運営基盤の整備を図った。
2. 全国盲ろう教育研究会会報に総会および研究協議会の報告を掲載・配布し、啓発活動をすすめると共に、会員の獲得に努めた。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、教育研究の向上に寄与すると共に会員相互の情報交換に役立てた。
4. 全国盲ろう教育研究会第14回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図ると共に、第15回研究協議会の準備を進めた。
5. 「盲ろう教育研究紀要第12号」の発行に向けて編集作業を行った。
6. Webサイトの内容の充実を図ったが、十分な情報提供には至らなかった。
7. 東京都盲ろう者支援センターと共催で、盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図った。

○原案通り、了承されました。

・議案2 2016年度会計報告

以下の通り、提案がなされました。

【2016年度全国盲ろう教育研究会会計報告】

【収入の部】

* 単位は円

項目	2016年度予算	2016年度決算	備考
前年度繰越	337207	337207	
年会費	260000	199000	2017年3月31日現在、会員数128名。納入者78名（複数年度分の納入を含む）
ご寄付	—	28250	
利息	—	4	
合計	597207	564461	

【支出の部】

* 単位は円

項目	2015年度予算	2015年度決算	備考
定期総会報告書発送費	30000	33500	会報第15号に定期総会報告を盛り込んだ。
会報第15号発送費	30000		
第14回研究協議会案内発送費	30000	36000	
盲ろう研究紀要第12号発行費	200000	0	
盲ろう研究紀要第12号発送費	50000	0	
Webサイト維持費	35000	18144	
事務費	45000	34771	
会議費	50000	28060	第96回～第99回運営委員会開催の交通費実費
予備費	4116	0	
合計	474116	150475	

残金 413986円【収入 564461円－支出 150475円】は次年度に繰り越します。

【第14回全国盲ろう教育研究会研究協議会会計報告】

【収入の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
参加費	196000	会員×28、非会員×28 計 196000円
宿泊費	230400	10000×22名＝220000円 ボランティア4名宿泊費 2600円×4名＝10400
懇親会費	54000	3000円×18名＝54000円
第13回繰越金	243070	
合計	723470	

【支出の部】

* 単位は円

項目	金額	備考
事務費	9975	
宿泊費	230160	宿泊費を10000円から5600円に変更。 返金4400円×22名を含む。
懇親会費	54000	
情報保障費	61290	ボランティア交通費
保育雑費	27827	
講師謝金・交通費	48520	
合計	431772	

残金 291698円【収入 723470円－支出 431772円】は、今後の研究協議会での運営費として使用します。

○原案通り、了承されました。

・議案3 2017年度事業計画

以下の通り、提案がなされました。

1. 定期的に運営委員会を開催し、運営基盤の充実を図る。
2. 全国盲ろう教育研究会総会・研究協議会報告を配布すると共に、研究会のリーフレットを作成・配布し、盲ろう教育に関する情報発信に努める。
3. 全国盲ろう教育研究会会報を発行し、盲ろうに関する情報提供を行うと共に、会員相互の情報交換に役立てる。
4. 全国盲ろう教育研究会第15回研究協議会を開催し、盲ろう児・者に関わる教育研究の向上を図るとともに、第16回研究協議会の準備を進める。
5. 「盲ろう教育研究紀要第12号」を発行し、「盲ろう研究紀要第13号」の編集作業を行う。
6. Webサイトの内容の充実と活用を図り、情報提供および情報交換を図る。
7. 盲ろう教育に携わる教員等を対象とした研修会を開催し、教育の充実を図る。

○原案通り、了承されました。

・議案4 2017年度予算

以下の通り、提案がなされました。

【2017年度国盲ろう教育研究会予算案】

【収入の部】

* 単位は円

項目	金額
前年度繰越	413986
年会費 (2000円×130名)	260000
合計	673986

【支出の部】

* 単位は円

項目	金額
定期総会報告書発送費	40000
会報発送費	40000
第15回研究協議会案内発送費	40000
研究紀要第12号発行費	200000
研究紀要第12号発送費	80000
リーフレット発行費	50000
リーフレット発送費	40000
Webサイト維持費	35000
事務費	60000
会議費	60000
予備費	28986
計	673986

○原案通り、了承されました。

・議案5 役員改選について

会規約第9条に従い、以下の通り、役員が選出されました。今まで、研究会運営にご尽力いただいた皆様、ありがとうございました。新役員の皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

会長	中澤	恵江
副会長	星野	勉
	松本	末男
会計	柴崎	美穂
会計監査	森	貞子
	左振	恵子
事務局長	星	祐子

●全国盲ろう教育研究会 第15回研究協議会報告

○講演概要 【8月5日】13:45～15:45

「先天性盲ろうA児のファンタジーを理解する経過とその考察
～自らを分析する～」

筑波技術大学大学院1年 森 敦史 氏

1 はじめに

ルーテル学院大学在学時に卒業論文（先天性盲ろう児におけるファンタジー理解の困難と理解に至るプロセス - 支援者側の援助に焦点をあてて - ）を執筆いたしました。

卒業論文を執筆するにあたり、以下のように課題と大学側からの条件がありました。

- ①自身を研究対象者として扱うという特殊な研究であること。
- ②研究方法についての課題。（客観性の担保と妥当性）
- ③専攻が社会福祉学科であるということ。（教育と福祉との関連付け）

以上のような課題があったため、卒論執筆に当たっては、自身に関する記録や関係者へのインタビューをベースに、できるだけ当事者である自身の記憶や回想を取り入れるように工夫をしました。しかし、自分や皆様にとっての理想、すなわち皆様にとっての「知りたい部分」である「当事者としての視点」を十分に取り入れることができなかつたことは、やむを得ないことであり、反省すべき点でもあります。

2 ファンタジーの理解に至るための条件である経験とは…

以上の反省を踏まえて、卒論では書けなかつたこと、さらには卒論の執筆を通して気がついたことを中心にお話しさせていただきます。

ファンタジーの理解に至るためには、いくつかの条件が相互に作用している必要があると考えられますが、特に「経験」は盲ろう児にとって最も重要なポイントなのではないだろうかと考えています。実際にファンタジーの理解に至るまでに、様々な出来事があったことは事実であり、自身もたくさんの経験をしたことを記憶しています。もっとも記憶に残る小学生時代の出来事を時系列にまとめました。

①岐阜ろう学校時代（小1—小4）

- ・空想の物語などは本当に存在していると思っていた
- ・「嘘」と「本当のこと」の区別ができなかつた（先生の冗談など）
- ・それでも自分は言い訳をしようとしていた（宿題を忘れたときなど）

②附属盲学校時代（小5—小6）

- ・たくさんの日本語に触れながらの経験の積み重ねと経験の拡充
- ・メールの使用開始（人が運ぶ手紙と違った経験）
- ・大人が子供向けに話すことへの疑問（赤ちゃん、サンタクロースなど）
- ・「夢」という言葉を知る
- ・「空想の世界」と「現実の世界」の区別が難しい物語への反応（ハリーポッター）
- ・読書の拡大

3 ファンタジーの理解に至るまでの要因（要素）

これまでの過程追跡から考察すると、ファンタジーの理解に至るには、次のような要因（要素）と条件があったと考えられます。

①ファンタジー理解に至るまでの要因（要素）

- ・人材⇒A児には多くの指導者・支援者と、前向きな家族が存在し、それらが新しい人との関わりを重視した事。
 - ・時間的配慮⇒時間をかけて一からの指導と、繰り返すという地道な支援が計画的に行われた事。
 - ・学習機会の確保⇒体験する・触る・学ぶなどの機会を多く導入し、家庭・放課後支援などでもその機会が確保された事。
 - ・興味と関心⇒A児が興味・関心を示した瞬時を見逃さず、言葉の獲得・概念形成と結びつけていく取り組みが、一貫して行われた事。
 - ・情報保障（提供）⇒A児の獲得した語彙を活用し、周囲の状況説明や情報を支援側が提供した事。
 - ・適切な回答⇒A児からの質問・疑問にできるだけ答え続ける。その際、A児の発言に不足する部分を適切に補填する指導が行われていた事。
 - ・共通目標の設定と情報共有⇒指導者・養育者・支援者との連携がとられ、共通目標の設定・情報の共有がなされた事。
- 以上が要因（要素）として考察できました。

②ファンタジー理解に至る条件

またA児に指導や支援をするに当たり、指導者・支援者・養育者によって、次の3つの条件に重点がおかれたことも過程追跡で検証できました。これらは相互に作用しています。

- ・経験の積み重ね⇒体験させる、触れさせる、確かめさせるなどの機会をできるだけ多く取り入れ、感情面での経験も重視する事が条件になる。
- ・言葉の獲得⇒日本語に触れる機会とコミュニケーションをする場面の提供、新しい言葉や表現を教えるなど、国語の学習の中で意図的な取り組みが条件になる。

・概念の形成⇒A児の経験や獲得した語彙を活用して、抽象的概念の説明と、現実との関連付けが条件となる。

4 ファンタジー理解に至るプロセスのまとめ

結論として前述のような要因（要素）と条件が揃ったことから、A児は次のように成果を得ています。

・興味・関心による広がり⇒経験の積み重ねによって生じた興味・関心を示すような場面と結び付けるように取り組みが行われたことによって、A児はあらゆることに興味や関心を示すようになった。

・理解の深まり⇒興味・関心の広がりによって、A児は興味や関心のあることに対し、「質問する」「確認する（確かめる）」「調べる」などといったことに積極的になり、結果としてあらゆる理解が深まった。

・理解の深まりによる興味・関心の広がり⇒あらゆる理解が深まることで、疑問や不思議が沸き起こり、他にも興味を示すようになった。

以上のような成果が積み重ねられることによって、曖昧なものが確実なものとなり、A児の概念は膨らんでいくという図式です。また抜け落ちていた、ファンタジーの理解も果たせたとと言えます。

また、このような要因と条件が揃う事で、A児は成果を積み重ねながら、次のような好循環が発生させていたと考察しました。

・興味・関心の広がり⇒疑問・不思議が沸き起こる⇒「質問」「確認」「調べる」⇒理解の深まり⇒さらに興味と関心は広がる⇒新たな疑問・不思議が沸き起こる⇒次なる

「質問」「確認」「調べる」⇒より深い理解の深まり⇒新たな興味・関心の広がり

このような経過で、A児はファンタジーの理解に至り、物語のみならず抽象的な理解も加速していく事になったことが、自身の卒業研究によって明らかにすることができました。

5 今後について

日本語の獲得とファンタジーの理解には、教育現場（学校）での教育に限らず、ICT技術の活用が大きく影響していると考えています。

実際に自身も早い段階からパソコンなどを使用しており、メールやインターネットを通して、「助詞」や「敬語」などの日本語での使い方を身につけながらファンタジーの理解を広げたことは、事実なのかも知れません。

今後は自身がICT技術を活用し、日本語の獲得やファンタジーの理解に影響を及ぼしたと言う成果を生かしつつ、盲ろう児の教育や情報保障へのICTの活用の可能性について研究をしていきたいと考えています。

○分科会 【8月5日】16:00~17:30

以下のグループに分かれて実施しました。

① 盲ろう幼児児童生徒を初めて担当したあなたへ

参加者：8名（教員、施設職員、学生）

まずは、参加者の方々に、担当している盲ろうのお子さんの状態と課題等をそれぞれ挙げていただきました。年齢や障害の状態等多様でしたが、共通して、課題として挙げられた以下の点を中心に話し合いをしました。

- ・コミュニケーションをどのようにとっていくのか
- ・サインを増やしていきたいが、どうすれば良いのか

お子さんとの関わりにおいては、まずは、本人の好きなことなどを一緒に行う中で、楽しさや嬉しさを十分に共有し、それをきっかけにやりとりをすることが挙げられました。本人にとって好きなことや楽しいことは、「もっとやりたい」という自発的な発信や他者との関わりややりとりにつながり、本人にとって心地よい経験、楽しい経験を一緒に行う中で、本人が分かる手段を用いながらやりとりを重ねていくことが大切であることを参加者で確認しました。

その際、本人の何気ないしぐさが、「無意識」の動作であっても、それを「意識化」させることでサインにつなげることや本人の発信に繋がるであろう方法で関わる教職員が本人に伝えることなどを確認しました。さらにオブジェクトキューを用いたやりとり、スケジュールボックスを使った予定の確認などの具体的な事例から学び合いました。

様々な悩みや課題に対して、短い時間ではありましたが、解決策を参加者みんなで考えたり、アイデアを共有したりすることができました。

（文責：事務局）

② 盲ろう疑似体験

参加者：15名（家族、教員、作業所職員等）

「〇〇さんの見え方、聞こえ方を理解したい」「盲ろうとはどういうことか、考えてみたい」という熱意にあふれた参加者が集まり、疑似体験を行いました。

まず、体験を行う前に、「見え方について」、「聞こえ方について」を学びました。ひとことに「見えにくい」「聞こえにくい」といってもさまざまな状態があることについて、それぞれの専門の立場から雷坂浩之先生（久里浜特別支

援学校)・柴崎美穂(東京都心身障害者福祉センター)が説明を行いました。

次にいよいよ体験です。参加者が2人1組になり、1名が盲ろう疑似体験、もう1名が介助を行います。盲ろう疑似体験で用いたのは、アイマスク、耳せん、ヘッドホン、iPodです。盲ろう者の見え方、聞こえ方はさまざまですが、今回の体験では、「全盲ろう」の疑似体験を行います。介助者役になった人は、歩行の誘導の基本的な留意点を、真剣なまなざしで聞いていました。そして、体験中のルールもいくつか確認します。コミュニケーションの方法は、「音声以外の方法で」というルールです。それぞれのペアで、「止まる」「進む」の合図をあらかじめ決めておきます。

準備ができれば、出発です。部屋を出て、建物の外を歩き、別の建物の中へ。地面の凸凹や傾斜、温度、匂い、振動など、さまざまなことを体験しながら前に進んだり立ち止まったり。「盲ろう者役の人に椅子に座ってもらってください」という指示も出ます。座ってほっとしたのもつかの間、次に出された課題は、「自動販売機で、盲ろう者役の人の好きな飲み物を買ってください。何があるか知らせて、本人に選んでもらってください」。・・・介助者役の皆さんに戸惑いが広がります。どんな飲み物があるかを見てから盲ろう者役に手書き文字で伝える人、盲ろう者役の人を自動販売機の前に連れて行ってボタンを触ってもらう人、「お茶でいい？」と聞く人。すかさず雷坂先生から質問が飛びます。「お茶しかないって言わなかった?」「あっ・・・・・・・・」。

たくさんの情報を伝えるのは、時間も労力も必要ですが、勝手な判断で省略してしまうと、盲ろう者に伝わる情報が非常に狭められてしまいます。どんな気持ちだろう。どうすればいいだろう。汗をかいたのは、久里浜の風が暑かったからだけではありません。

飲み物を買うまでの課題を終えたら、ペアを交代して、もとの道に戻りました。

疑似体験の時間は、限られています。アイマスクやヘッドホンを外せば、光と音のある元の世界です。でも、参加者一人ひとりが、たくさんのことを感じ、考えながら、盲ろうを理解するための想像力を研ぎ澄まそうと集中した、貴重な90分となりました。

(文責：柴崎美穂)

③ 就学前の子どもたちとのかかわり

参加者：14名(教員、保護者、医師)

保護者の希望と教員が認識している目標設定と食い違いがあること、その中でいかに共通理解を図っていくのか、といったことを中心に検討しました。

たとえば、「点字の習得」といった時に、そこに至るまでには、コミュニケーションの発達の段階や物を触って認識するまでの段階などを保護者の方に理

解していただくことが大切ではないか、そして、保護者の方に、わかりやすく伝えるだけの知識を身につけておくことが必要であるといった話しをしました。その前提として、日頃から、お子さんを中心にして、保護者と教員がコミュニケーションをとっていくことの大切さも確認しました。

また、保護者の方から、園の集団活動の中で、本人が少しでも分かるような方法を園の先生方と考えたいが、具体的にどのような方法があるのかといった悩みも出されました。たとえば、絵本を見るときには、別途、本を用意してもらうことや触覚の手がかりがある本を用意するといった方法も考えられるのではないかとといったアイデアが出されました。

* 東京医療センター耳鼻咽喉科医師の松永先生から、1歳から人工内耳の手術は行っているが、盲ろうの子の場合は同じでいいかということ分かっていない、慎重に考えているのが現状である、海外の情報なども収集して、盲ろうのお子さんの人工内耳について検討していきたいといった情報提供もありました。

(文責：事務局)

④サポートブックをつくってみよう

参加者：10名（家族、サポーター、作業所職員、事業所職員、教員等）

皆さん、サポートブックの必要性を感じておられ、実際に作るにはどんな内容が良いか、どのように活用すると効果的か、ということ課題として持っておられるようでした。

昨年度とは集まったメンバーの大部分が変わっていましたが、内容については、2年続けての話し合いの中でほぼ固まってきたように感じました。家族と離れて過ごすことを考えて、受信、発信の方法（サインなど）、トイレの方法、好きなこと、嫌いなこと、アレルギーや薬、困った時の対応方法、お願いしておきたいこと（初めての場面での探索行動は止めないでほしい、など）、緊急連絡先等が挙げられます。今回は「この内容を家族発信の文体で書くのか、本人発信の文体で書くのか」という話題が新たに出了ました。これも大切な視点だと思いました。

次に、これらの情報を活用しやすくするための工夫が多く話し合われました。まず、必要な時にすぐに見られるように、目次やインデックスは必須です。また、形式は、支援を受ける場面や時間に合わせて、一枚もののシート、必要な内容だけを綴じたバインダー、カード形式にして1ページに2枚入るアルバムに保存してその時必要な物だけリングでまとめる、等の方法があり、各自で使いやすいように工夫されているようでした。

今回、新しく出たアイデアは、QRコードです。これを使えば、動画が見られるようで、コミュニケーション方法など、説明や写真では伝わりにくいことがわかりやすい！とみんなで感動しました。ただ、技術的な問題がありますね。

また、いろんな場面を想定したシートをデータで作っておき、必要に応じてプリントする、そのためのテンプレートを作る、など、先進的なアイデアが次々と出されました。来年の協議会までにテンプレートを作る！と宣言する方までおられ、期待の拍手で盛り上がりました。

この他、十分に活用するために、特にこうしてほしいと自分で伝えにくい人たちは、出会った時に支援者がサポートブックを見たり家族から引き継ぎを受ける時間も活動時間に組み込んでおく、いや、それよりもIDD（いつでも・どこでも・だれとでも）でわかりやすい物を作る工夫が大切、等と議論が交わされました。また、参加者の一人だった歯科医から、歯科受診場面のサポートブックがあればありがたい、というような提案もありました。

サポートブックも、新しい技術を取り入れてどんどん進化していきます。サポートブック作りのサポートをする、という役割の方も生まれそうです。

（文責：長尾公美子）

⑤講演者を囲んで ～何でも聴いてみよう～

参加者：23名（家族、サポーター、作業所職員、教員、学生等）

参加者から出された質問と森さんの返答は以下の通りです。

- Q 1. 講演をパソコンで文字で発信しようとは思わなかったのか。
A 1. 今回は思わなかったが、今後、活用する場面もあると思う。大学院のゼミや先生とのやり取りの中では、活用している。
- Q 2. 森さんにとって、ことばの数の獲得は何をもたらしたか。
A 2. 理解できる世界の拡がりをもたらした。
- Q 3. 手話言語、日本語についてはどのように考えているか。
Q 3. 私のしたいことは、盲ろう者がよりよくコミュニケーションがとれること、通訳者がいなくてもコミュにエーションできることを考えている。
- Q 4. （社会福祉を学んでいる学生から）論文を書くにあたってのアドバイスが欲しい。
A 4. 早くに始めること。
- Q 5. 今の社会は、すぐ答えを求める社会だと思うが、森さんのようにこつこつと高めていくような姿勢はいつ身についたのか。
A 5. 小学部の担任の先生からは、とにかくよく質問する児童だったと言われた。
- Q 6. ふなっしーはイメージできるか。
A 6. すぐ場面が変わるようなものはイメージしにくい。
- Q 7. （盲難聴の）小学生の子どもに夏休みの読書で、おすすめの本はありますか。
A 7. 自分の体験と重なるような本がいいと思う。夏休みは、学校ではできないような体験をたくさんしたらよいと思う。

Q 8. 支援機器の活用はいつ頃から始めたらよいか。

A 8. 家族や辞書で調べたり、とにかく、自分で調べようということが大切だ。

(文責：事務局)

○実践報告概要 【8月6日】10:00~12:00

「盲ろうAさんの教育実践報告

～感情・感性共有型コミュニケーションを考える～」

横浜訓盲学院 小学部 後石原 恵美子 氏

1 実践報告の内容

- ・学院について
- ・Aさんについて
- ・教室環境・校内環境について
- ・オブジェクトキューとサインについて
- ・Aさん、学校生活の様子



2 横浜訓盲学院について

- ・重複障がいの教育に特化
- ・T T (Team Teaching) の指導体制
- ・自立活動主体の教育
- ・専攻科生活科の設置
- ・複数学年からなる以下の4つのグループを編成し、指導を行っている。

3 Aさんについて

平成18年生まれ 小学5年生 女子児童

- ・両眼網膜全はく離による視力障害（未熟児網膜症） 右：光覚(+)
- ・両側感音性難聴による聴力障害 平均聴力58dB（裸耳）
- ・学校では補聴器装用が定着しつつある。 …
- ・移動について：7月より単独歩行が見られるようになる。後方介助での歩行を好むが、片手引きでも歩くことができる。
- *学院の言語聴覚士の資格を有する教員より聴覚活用、補聴器装用等について補足説明があった。

4 教室環境・校内環境について

1. 小学部の教室環境



(1) ホームルームスペース

- ・朝の会、帰りの会などホームルームに使用
- ・Aさんにとってのホームベース

(2) マルチ（多目的）スペース

- ・主に給食時に使用
- ・「食べる」ことに密接する課題を行う。

(3) 更衣室

- ・着替えに使用

(4) トイレ

- ・教室の隣に設置

重複障がい児にとって教室から直接トイレに行けることは、排せつの自立に向けての大きなステップである。

(5) 教室環境を整えることの意味

- ・物事の因果関係の理解
- ・自主的、主体的な行動の促進

活動場所や内容に見通しをもち安心して生活することができる。

自分の好きなこと、好きな場所を表現すること、伝えることができる。

2. 校内環境

- ・各教室・活動にシンボルとなるマーク（オブジェクトキュー）を設置



5 オブジェクトキューとサイン

- ・瞬間消失型ツール：発信したら、すぐに消失してしまうツール
例) 音声言語 手話 身振りサイン など
- ・痕跡型ツール：発信したあとも「かたち」として残るツール
例) 墨字 点字 写真 オブジェクトキュー など

1. 「活動内容」や「場所」をあらわすオブジェクトキューとサイン

- ・オブジェクトキューを使用したAさんの時間割

これから何が起こるのか、見通しをたてる。活動の始まりと終わりを明確にすることを心がける。

- ・Hand under Hand (ハンドアンダーハンド) の実践



2. 「ひと」をあらわすオブジェクトキューとサイン

- ・「後石原」をあらわすオブジェクトキューとサイン
- ・児童ひとりひとりのオブジェクトキュー

自分の「もの」がわかる。

「もの」「ひと」それぞれに名前があり、必要なもの、相手を表現することができる。

- ・「わかりやすく、見通しを持ちやすい環境作り」とは？

サインやオブジェクトキューを使う「人」が、外界への最大の窓口

6 Aさん、学校生活の様子

1. 「信頼関係を築くことがすべてのスタート」

- ・相手のペース、サインをきちんと受け止める。
要求伝達だけではなく、相手を尊重し寄り添う
- ・できるかぎり多くの時間をともに過ごす。
人こそが最大・最良の情報源
- ・感情豊かにやりとりをする。
お互いに感情の伝わるやりとりをする。
要求伝達だけではない、豊かなやりとりを！
- ・朝の出会い（あいさつ）の時間を大切にすること。
玄関：1日の始まりの場所。Aさんと担任（私）の最初のあいさつの場所。

担任（私）はAさんにとって安心できる相手、友好的な相手であることを伝える場所。自分以外の人の存在を知る場所。人と接点をもつための力を育む場所。

2. 「あそび」の時間を大切にすること

- ・ Aさんが興味があり、自発的に活動できるあそびを通してやりとりを行う。
さまざまな感情を共有することの大切さ
- ・ 納得がいくまでとことん取り組む。時には「待つ」。
自己決定することの大切さ

3. 1日のまとめ ふりかえりの時間を大切にすること

- ・ 毎日の「ふりかえりノート」の活用



4. 今後の課題

- ・ 感情豊かに人とかわり、社会的なコミュニケーション力を高める。
触手話を視野にいれた発信
受信の力をつける
- ・ 実体験の中で物事の因果関係の理解を深める。
- ・ 1日、1週間など時間の概念を習得する。
過去について人と一緒に振り返り思い出を共有する。
いま（現在）をともに豊かに喜びも悲しみも、さまざまな感情を分かち合う。
安心して未来に向かう、未来を楽しみに思う。
- ・ 周囲の状況、環境などの情報を得る力
- ・ 自分の要求、意思を伝える力

人との関わりの中で、さまざまな感情や感性を共有する力「共感力」を育んで行きたいと思っています。

○ポスターセッション

以下、5本のポスターの発表がありました。全体場でポスターの概要を説明後、興味関心のあるポスターのところに移動し、活発なやりとりが行われました。発表いただいた方々に感謝申し上げます。

* ポスター発表の内容については、「研究紀要」に投稿を依頼したいと考えております。

①就学前の盲ろう児の療育の実態

東京都盲ろう者支援センター 前田 晃秀 氏

* ポスターより以下、転載。

方法

- 調査方法
郵送によるアンケート調査
- 対象
「ふうわ」の会員79世帯
「CHARGEの会」の会員145世帯
- 調査基準日
平成29年1月
- 回収
100通(回収率:44.6%)
- 分析対象
視覚障害と聴覚障害について
いずれも「ある」と回答した87通



結果④療育・発達支援のニーズ



障害が複数あるため、どこにも属することができず、どう育てて良いのが見通しが持てずきつかった

発達支援や療育の場のわかりやすい道筋があればと思う。親主体過ぎて辛い

療育や相談の場の情報を得ることができず、自分ですべてを探した

トータルで一緒に考え、コーディネートしてくれる機関があれば、安心して子どもの成長を見守れる

自由回答

- ②盲ろう生徒との関わりの中で大切にしてきたこと
東京都立久我山青光学園 岡澤 治樹 氏

- ③Sさんの移行支援
新潟県立新潟盲学校
上田 淳一 氏

- ④ 徳島盲ろう者友の会ふうわ部
会の取組
徳島視覚支援学校
(鳴門教育大学大学院 1年)
長尾公美子 氏



- ⑤ 盲ろう幼児担当教員研修会の取組
国立特別支援教育総合研究所 星 祐子

○先天性盲ろう児者の活動プログラム報告

今年度の盲ろう児童者活動プログラムでは、先天性盲ろう児者12名の参加があり、30名のボランティアの方々にご協力いただきました。会場は、筑波大学附属久里浜特別支援学校をお借りし、幼稚部スペースをメインの活動拠点として行いました。

幼稚部スペースでは、3種類の天井ブランコやトランポリン、ゴロゴロスペース、その他、バランスボールや風船、室内カーなど、様々な遊具や感覚遊びができるものに囲まれて、12名の盲ろう児者がそれぞれの好きな時間を満喫する様子がみられました。部屋の壁を隅から隅まで辿って何があるか確かめる人、2人でブランコに乗って体重を掛け合いそのスリルを楽しむ人、気に入ったゴロゴロスペースのブランケットに包まって過ごす人、太陽の光が差し込むスペースを見つけその日差しを楽しむ人、流れる時間も十人十色です。

幼稚部スペースの他に、久里浜特別支援学校のプールや、2日目には、研究棟のスヌーズレンの部屋と、部屋の床全体がトランポリンになっているトランポリン室をお借りしました。多くの盲ろう児者が一番楽しみにしていたプールでは、浮き輪でプカプカ浮いたり、潜ってみたり、水の上のマットに仰向けになって日光浴を楽しんだり、真っ青な海が目の前に広がる絶景と天候に恵まれての活動となりました。スヌーズレンの部屋では、ウォーターベットやカラ

フルな光、部屋に広がる心地よい香りを楽しみました。トランポリン室では、最初は床を恐る恐る確かめていた人もいましたが、最後には思いっきり飛び跳ねて楽しむ様子もみられました。両日とも行ったお菓子バイキングでは、いろいろなお菓子を触ったり、匂いを嗅いだり、少しかじってみたりと、触覚、嗅覚、味覚で好きなお菓子を探し出していました。

今回ご協力いただいた30名のボランティアの方々には、STの方、視覚・聴覚・知的の特別支援学校の先生方、盲ろう者通訳・介助員の方、心身障害者福祉センターの職員の方、保護者の方、国立リハビリテーション学院の学生の方、大学生の方と本当に様々なご所属からご参加をいただきました。初めて盲ろう児者と初めて関わるというボランティアの方もいらっしゃる、最初はどうか戸惑われている様子もありましたが、保護者の方から引き継ぎを受けたサインやコミュニケーション方法を使って、試行錯誤しながら一生懸命盲ろう児者とコミュニケーションを取ろうとされていました。また、たくさんのボランティアの方が、担当以外の盲ろう児者にも積極的に触れ合い、声をかけられていて、参加した12名の盲ろう児者が様々な方と関わり触れ合った2日間となったことも印象的です。

研究会で活動報告をさせていただいた際には、保護者の方から「本人がとても楽しんで、この2日間の活動に参加していた。」というご感想をいただきました。とても恵まれた環境の中、参加した盲ろう児者とご協力いただいたボランティアの方々、総勢42名の笑顔が溢れる2日間となりました。会場をお借りした筑波附属久里浜特別支援学校、ご支援、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

●運営委員会・事務局より

第15回定期総会・研究協議会で実践報告、講演、ポスター発表をしてくださった方々、そしてご参加いただいた皆様、お忙しい中、ありがとうございます。今回も、ボランティアの方々をはじめとして、多くの方々に多大なるご協力をいただきましたこと、心よりお礼申し上げます。皆様からいただいたアンケートでは、今後の運営に対しても貴重なご意見をいただくことができました。これからもより充実した研究協議会となるよう努めてまいりますので、今後ともご協力のほど、宜しく願いいたします。

●会費納入のお知らせ

・年会費（2,000円／年）の納入状況を、宛名ラベルの下欄に記載しています。未納のある方は、納入をお願いいたします。ラベル印刷後に納入された場合など、行き違いがありましたら、どうぞご容赦下さい。

(例)「2017未」: 2017年度分未納を表しています。

・ご本人名義で納入してください。「〇〇年度年会費」と記入してください。

◇振込・振替先 (みずほ銀行、または ゆうちょ銀行をご利用下さい)

みずほ銀行 本郷支店

口座番号 普通預金 8062806

口座名義 全国盲ろう教育研究会会計 柴崎 美穂

ゆうちょ銀行

口座番号 00100-6-484136

加入者名 全国盲ろう教育研究会

●連絡先変更等のある方は、お手数でも事務局までご連絡ください。

●2018年度の夏の盲ろう関係の大会・集い等のご案内

CHARGEの会 夏の集い

8月4日(土) 横浜にて開催

全国盲ろう者大会

8月31日(金)～9月2日(日) 幕張メッセにて開催

*ふうわ交流広場を設置

☆☆お知らせ☆☆

◆全国盲ろう教育研究会 第16回定期総会・研究協議会

期日: 2018年8月4日(土)・5日(日)

場所: 国立特別支援教育総合研究所

(神奈川県横須賀市野比5-1-1)

内容: 実践報告、海外研修報告、ポスター発表、分科会

●研究協議会では、皆様が持ち寄ってくださった全国各地の実践報告・交流を大切にしています。是非ともポスター発表をご検討ください。